

SPODにおける 新任教員研修の効果



■ 調査の目的

SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）は平成20年に発足以来、今日まで様々なFD・SD事業を展開してきた。そして平成24年度、SPODの連携効果及び組織変容の検証のため「調査・研究プロジェクト」のワーキンググループが設置された。その一つである「連携効果検証ワーキンググループ」では、先ず手始めにSPODで実施している「新任教員研修」の効果検証のためのアンケート調査を平成25年度中に実施することが決まった。その目的は、今までの「新任教員研修」

の取り組みを振り返り、今後のプログラムの改善のための基礎資料を得るためである。今回はSPODで標準化され、コア校4校（愛媛大学、高知大学、香川大学、徳島大学）で実施されているプログラム「新任教員研修」に焦点をあてたアンケート調査である。このアンケート調査に回答頂いた先生方には厚くお礼申し上げたい。以下に、概要、結果、考察、まとめを記載して、アンケート調査報告としたい。

■ 調査の概要

➡ 調査対象及び方法

この調査は、平成22年度から24年度までの3年間のSPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）新任教員研修の受講者208人を調査対象とした。調査方法は、各受講者にアンケート用紙を配布し、回答用紙（マークシート）を回収した。

➡ 調査票の回収状況

調査票の回収状況は、調査対象者208人（国立大142人、公立大20人、私立大（短大を含む）40人、高専6人）のうち、回答数は90人で、回収率は43.3%であった。（基本属性のみ、1名無記名）

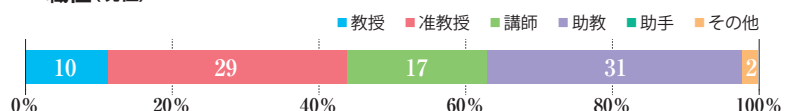
➡ 調査時期

この調査は、平成26年2月1日から2月21日まで実施した。

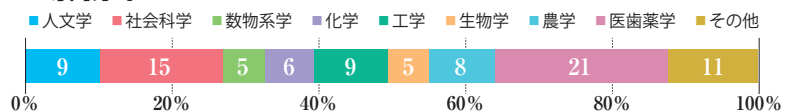
*ここでいう「新任教員研修」とは、愛媛大学では「授業デザインワークショップ」、高知大学では「新任教員FDワークショップ」、香川大学では「よりよい授業のためのFDワークショップ」、徳島大学では「教育力開発基礎プログラム」を指す。

➡ 基本属性

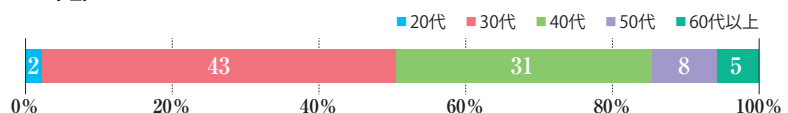
● 職位(現在)



● 専門分野



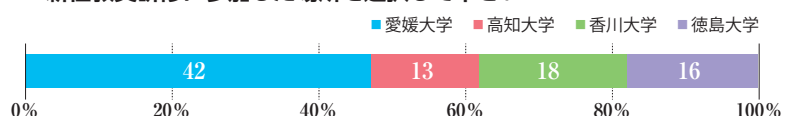
● 年齢



● 新任教員研修に参加された年度を選択して下さい



● 新任教員研修に参加した場所を選択して下さい

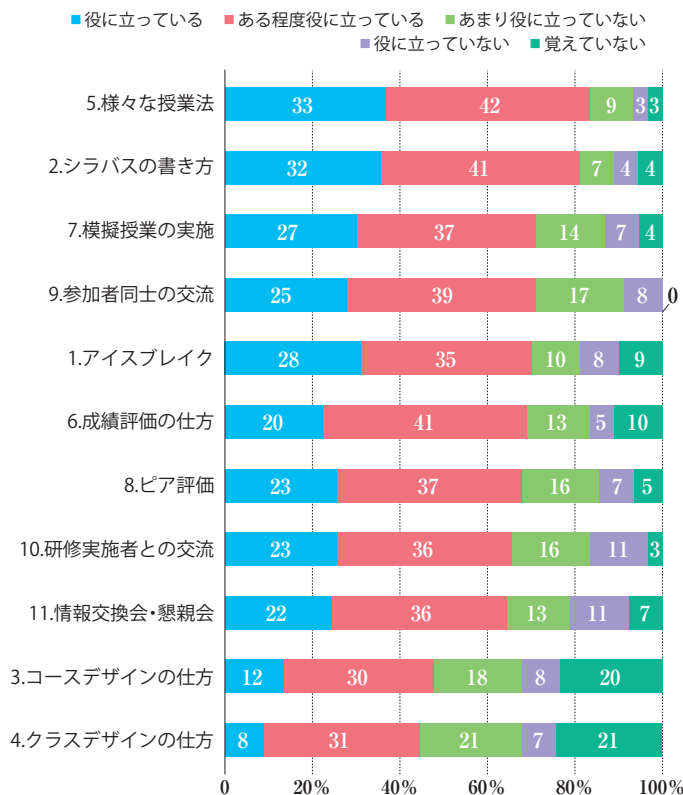


◆ SPOD 新任教員研修アンケート分析から見える研修の成果と課題

■ SPOD の新任教員研修の内容が役に立っていることについて

項目全体において、役に立っている、ある程度役に立っていると回答した教員が、平均して66%に達していることから、SPOD で実施している新任教員研修は、参加者にとって概ね有益であったことが伺える。特に、「様々な授業方法」、「シラバスの書き方」については、ある程度役に立っているを含めて、役に立っていると回答した教員が80%を超えている。この結果から、新任教員研修のコアの目的である、授業設計の基本を習得することが達成できていると推察できる。また、「模擬授業の実施」のように、実践的なプログラムは、日常の教育活動における役立ち度が高いことが分かる。一方、「コースデザイン」、「クラスデザイン」については、覚えていないと回答した教員が20%を超えていることから、プログラムの組み方や説明の仕方などが、今後の課題である。

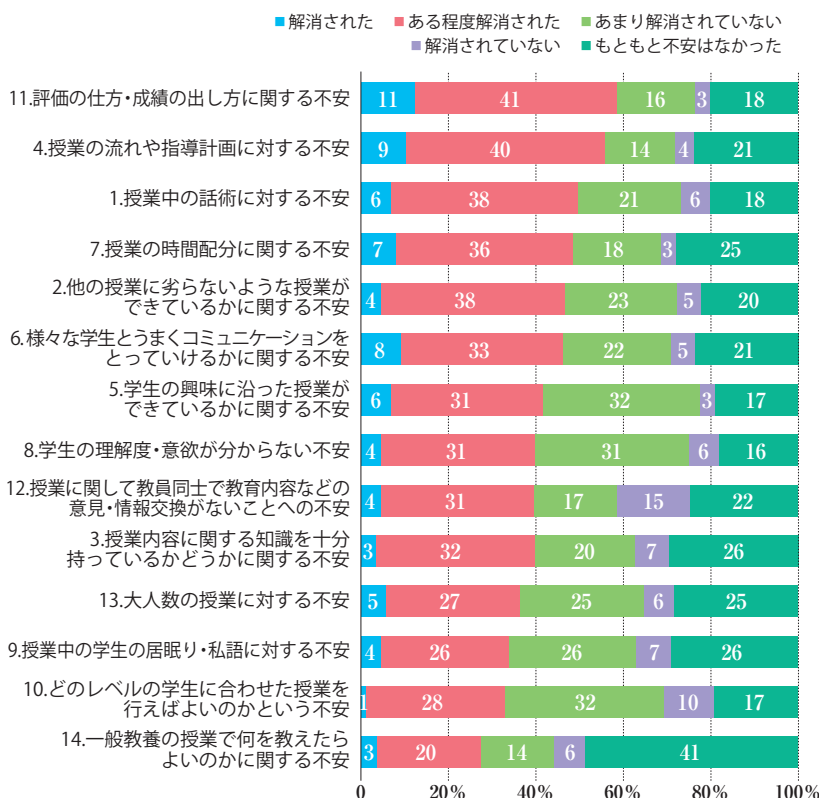
● 新任教員研修の教育活動への役立ち度



■ SPOD の新任教員研修で解消された不安について

不安がある程度解消されたを含め、解消されたと回答した教員が比較的多かった項目として、成績評価、指導計画、時間配分などの授業設計に関わる内容が挙げられる。このことから、役立ち度と同様に、研修の目的に関連する内容においては、新任教員の不安解消に繋がっていることが分かる。また、学生とのコミュニケーションの取り方や授業中の話術といった教育技術に関する不安を解消することにも、少なからず貢献できている。学生の興味や理解度・意欲の把握に関する不安について解消できたという回答が4割以下に留まっており、内容の充実が課題となる。解消されたという回答が少なかった項目では、本研修で取り扱っていない内容も含まれており、他のFDプログラムと連携し、新任教員の不安解消、教育力の向上に取り組むことが求められる。

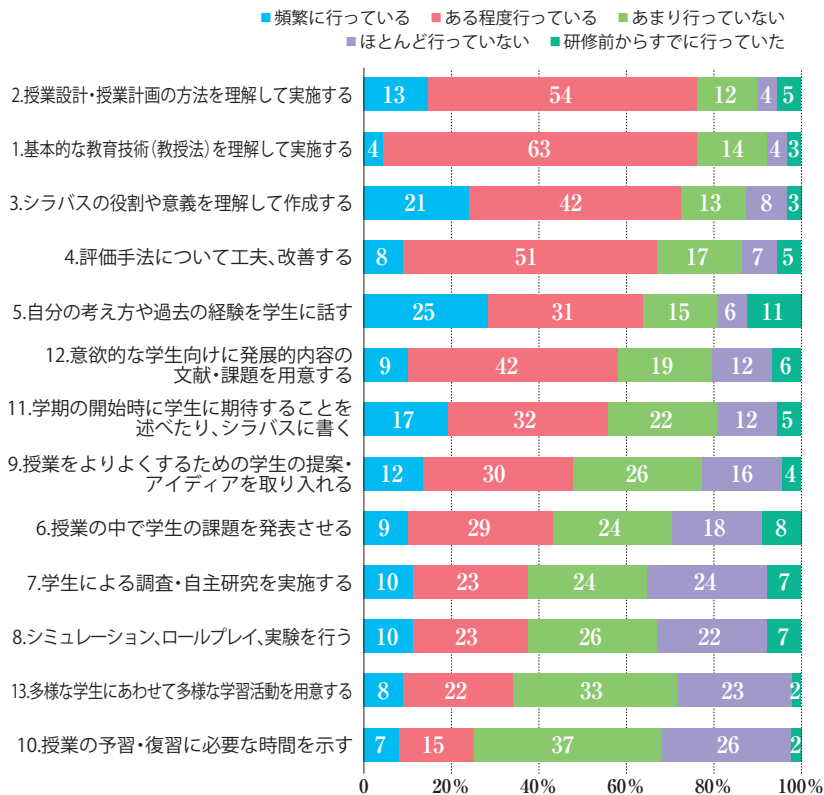
● 新任教員研修で解消された不安



■ 研修後の日常の授業活動について

研修後においては、授業設計・授業計画の方法、シラバスの役割や意義、教育技術等を理解し、日常の教育活動に取り組んでいる教員が比較的多いことが伺える。評価手法についての工夫や改善も含めると、研修で習得した知識や理解が日常の教育活動に活かされていることが分かる。一方、授業に学生提案の課題を取り入れること、学生に課題を発表させること、学生による調査・自主研究を実施することは、学生の能動的学習（アクティブ・ラーニング）に繋がる内容であるため、教員が実施できるように具体例を示すなどの改善が必要である。また、「授業の予習・復習に必要な時間を示す」ことについては学生の主体的な学習や授業外学習の促進に関連する内容であるため、その重要性を示すことや事例を紹介するなどの工夫が課題である。

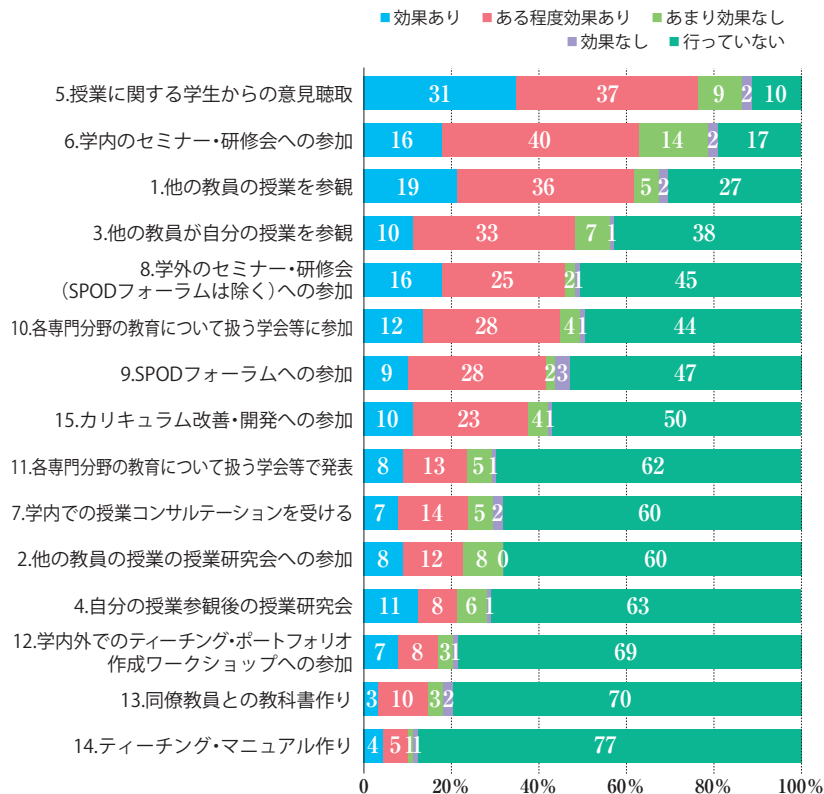
● 研修後の日常の授業活動について



■ 研修後における教育力向上のための活動への参加とその有効性について

教育力向上のための活動については、全体的に行っていないと回答した教員が多く存在していることが分かる。しかし、行っていると回答した教員の中では、効果の有無について、ある程度効果ありを含めると、効果ありと回答した教員は、平均して80%程度であることが分かる。項目別では、「授業に関する学生からの意見聴取」、「他の教員の授業を参観」、「学内のセミナー・研修会への参加」については、行っていると回答した教員は比較的多い。これらの項目には授業評価アンケートや、授業公開なども含まれており、大学全体で組織的に取り組んでいるケースがあると考えられる。教育力向上のための活動では、個人レベルの取り組みだけでなく、組織的な取り組みが必要であることが推察できる。

● 研修後における教育力向上のための活動への参加とその有効性



■ まとめと今後の課題

調査・研究プロジェクト統括
愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室／副室長・准教授 山田 剛史

SPOD では、これまでの取組の効果を検証すること、そこから次の課題を見出し、さらなる充実を図ることを目的として、平成 24 年度に「調査・研究プロジェクト」を立ち上げた。その中に「連携効果検証 WG」を置き、まず四国地区（コア校 4 大学）において標準化された新任教員研修を調査の対象とした。具体的には平成 22 年度から 24 年度までの 3 年の間に当該研修を受講した教員を対象に、その後の教育活動への波及効果等を捉えることを目的として調査を企画・実施した。

一般的に研修の効果検証として用いられているのが、受講直後の満足度調査であるが、研修の効果として十分とは言えない。カークパトリックは研修効果のレベルとして、受講直後の反応（Reaction）、学習成果（Learning）、行動変容（Behavior）、組織変容（Result）の 4 つを提唱している。その意味では多くの研修評価はレベル 1 にとどまっていると言える。何のための研修か。それはその場における満足感等の情緒的なものではなく、その後の個人の教育活動や組織の活性化、最終的には学生の学びの成功に結びつかなければならない。そこで、本 WG ではこのフレームを意識しながら対象・時期・内容を検討し、調査を実施した。

個々の結果については本文を参考にさせていただきたいが、新

任教員に対する集中的な研修の機会は、教員の教育活動を一歩前に進める上で有効であることが示されたと言える。特に、研修後の日常の授業で様々な方法を実施していることも伺えた。

ここでは、教育力向上のためにどのような活動が必要なのかに関する自由記述を整理してみたい。SPOD が提供している研修等に参加することを肯定する意見も多い一方、一般的な技法・ツールの提供に留まっていることに対するコメントもいくつか見られた。近い分野を含む教員間での深い交流や学生の特性に応じた実践的な内容、組織として積極的に取り組む姿勢の重要性も指摘されていた。限られたリソースで全ての要求に応じることは難しいが、調査の結果も踏まえてさらなる改善に臨みたい。

また、明らかにしなければならない連携効果の検証対象は他にも様々存在する。今回は「新任教員（教員個人）」「授業（ミクロレベル）」を主な調査対象としたが、キャリアステージに対応した教育上の課題が存在する。また、FD のターゲットとして、カリキュラム（ミドル）や組織（マクロ）など異なるレベルが存在し、複雑な課題を内包している。こうした課題を解決していくためにも、調査・研究活動を通じて実態を把握し、具体的な方策を検討・提供していくことが求められる。

<編集後記>

徳島大学では「新任教員研修」の受講生を対象とし、そのフォローアップとして平成 17 年度より授業参観と授業研究会を行う「授業コンサルテーション」を実施している。その幾つかの授業研究会で、熱心な先生方が実際に新任教員研修で身につけた授業法を実践されている例に出遭うと FD 冥利に尽きることがある。例えば、保健学科のある先生は、事前に web 上で事例映像を観て、授業ではそれについて学生同士に議論させ発表させる反転授業を実施したり、また別の先生は事前に看護事例を与え、その診断のレポートを書かせ、授業当日はそのレポートを学生に発表させることを行って、学生に考えさせるアクティブ・ラーニングを行っている。また、歯学部のある先生は、学生の理解度を確かめるために、授業最後にミニッツペーパーを配り、今日授業で学んだことや分からなかった事に対する質問を書かせたりしている。これらの取組を「新任教員研修がきっかけで行うようになりました。」と話して下さる先生に出会うと、新任教員研修が確実に役だっていることを実感させられるのである。

徳島大学総合教育センター／准教授 宮田 政徳

本アンケート調査で、研修後における教育力向上のための活動については全体的に行っていないと回答した教員が多く存在していることが分かった。FD が教育力向上に効果があると実感できれば、教員自身にとっても意味のある FD になる。教育技術の向上に役立つ具体的なもの、即効性のあるものが提供できるよう、内容の充実を図り、SPOD で行われる FD への参加者の増加を目指していきたい。本アンケート調査にご協力いただきました SPOD 加盟校の先生方に厚く御礼申し上げます。

徳島大学総合教育センター／特任研究員 上岡 麻衣子

SPOD 調査・研究プロジェクト 連携効果検証ワーキンググループ

平成 27 年 1 月

編集 徳島大学総合教育センター
発行 SPOD 調査・研究プロジェクト

http://www.spod.ehime-u.ac.jp/chosa_cate2/